

# 街路樹

## 自らすすんで学ぶということを考えてみます

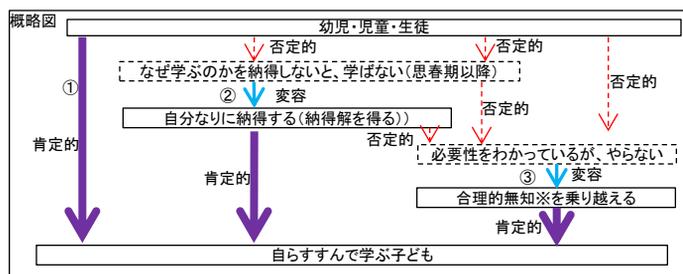


## いじめの初期段階は ささいなトラブル ～生徒指導～

自らすすんで学ぶようになるにはということを考えてみます。



幼稚園や学校で私たち教員は、たゆまぬ研修と実践により、子どもたちに、知的好奇心をもたせる等の活動や授業をとおして、子どもたちは自らすすんで学ぶようになっています。(①の状況)



しかし、思春期の頃から、学ぶ意義を自分なりに納得しないと学習しないようになる子どももいます(②の状況)。そのような子どもには各自が納得できるようになる指導をしたり活動をさせたりしてはどうでしょうか。例えば、「男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日」で、高校生の甥の「なぜ勉強をするのか」という問いに、寅さんは、「勉強した奴は…筋道を立てて…考えることができるんだ」と答えて、甥は納得しています。

また、わかっても学習に向かわない(③の状況)子どもにはElem等での学習も含めたキャリア教育の面から考えさせることも指導の1つとしてあるのではないかと思います。

私たち教員は、常に子どもたちの実態を把握し、その時々にあった指導により、生涯にわたって学び続けるという気持ちを育成していきたいものです。

※合理的無知：経済用語。あるひとつのことを知るによって得られるメリットと、それを知るためにかかるコスト(デメリット)を合理的に考えて、コスト(経済的、時間的コスト)がメリットを大きく上回るような場合には、それについて勉強する価値はないと判断して勉強を合理的に放棄するという考え方。



参考：

「科学的根拠で示す学習意欲を高める12の方法」(辰野千壽 著)

「勉強するのは何のため」(苦野一徳 著)

「たった一度の人生を変える勉強をしよう」(藤原和博 著)

「学びとは何か(探究人)になるために」(今井むつみ 著)

「男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日」

「18歳が社会を変える?選挙の経済学」(オコノミヤ Etlr 5/18)

いじめ、とりわけ「暴力を伴わないいじめ」の場合、その始まりは児童生徒の間でよく見られるトラブルです。それがその後エスカレートして深刻ないじめへと発展するかどうかについては、その段階で見極めることはできません。いじめの「早期発見」というのは、風邪で言うならひきはじめの段階から見過ぎさないということであり、更に言うなら未然防止が最も効果的ということです。

しかし、1つの学校内でも、同じ出来事に対する反応には、温度差があり、その温度差が対応の差となります。



そのような問題をなくすために、

- ① いじめか否かを発見者の個人的な判断に委ねることなく「組織」で行うこと。
- ② いじめという事象に対する認識の共有化を図る校内研修等を実施すること。

などの手立てが必要で、国立教育政策研究所「いじめに備える基礎知識」(平成27年7月発行)等を活用し、認識の共有化を図り、組織的な対応に努めてください。

「国立教育政策研究所生徒指導リーフ」より

## 教育相談室から



遠く離れることで見えるものがある。近付くことで見えるものがある。

私用で上京した。用事が早目に済んだので相撲観戦をした。生憎、当日券は最上階しかなかった。当然表情や仕草はよく見えなかったが、テレビでは見ることでできない観客の反応や黒子に徹する呼び出しさんの動き等の雰囲気味わうには十分な席だった。

電話で相談を受けている。大半は保護者からの相談である。我が子中心の発言となり、一方的にまくし立てられることも多い。反面、我が子の問題ながら他人事のように冷たい発言に終始する保護者もいる。前者には、もっと広い視野から見てみるように助言している。後者には、もう少し子どもに寄り添い細部にも目を向ける機会にしてみるように助言している。いずれも子育てのヒントとしてほしいという願いからである。様々な視点が必要なのだと思う。

相撲観戦も次の機会には土俵近くで見たいと思った。

